

私の一冊

一般教育等 野嶋秀子 先生

なかにし礼著 『赤い月』 上・下

小鹿図書館 : 913.6/N 38 (新潮社)

初めて「赤い月」に会ったのは映画「赤い月」でした。主演女優がとても頑張っているという感じを受けました。一方で一寸内容詰め込み過ぎの感は否めませんでした。しかし惹かれるものがありましたので原作本を読みました。上下巻で四六判520ページの長編小説です。一気に読み終わりました。映画と本は別物です。本は十二分に楽しむことができます。

映画「赤い月」の公式ホームページ の解説の一部が小説「赤い月」の紹介になっていますのでここに引用します。

直木賞作家・なかにし礼の実際の体験を下に、激動の時代を生き抜いた彼の母の姿を描いた小説「赤い月」。2001年5月に刊行されるや、各方面から絶賛を浴び20万部を超えるベストセラーになった。「この小説を書く為に生きてきた」と断言するほど原作者の強い思いが込められているとともに、「すべては本当に起こったこと」と言うように彼の実体験に基づいた真実の物語である。第二次世界大戦終末期。舞台は政府・軍部が一体となって喧伝した偽りの夢の大地＝満州(現中国東北部)。「五族協和」「王道楽土」のローガンに魅せられ、一攫千金を求めて大陸に渡った多くの日本人たちのなかでも主人公・波子は桁外れな成功を夫・勇太郎とともに築きあげ、輝かしい栄華の日々を謳歌する。しかし、そんな日々もつかの間、日本の敗戦と同時に一瞬にして築き上げたすべてを失う。牡丹江(ぼたんこう)からの逃亡の旅、ハルビンでの困窮の日々を強じんな意思力で愛に生き、子供を守り抜いた1人の女性・波子。彼女の波瀾の半生を描いたこの渾身の書は読者に圧倒的な迫力で迫ってくる。「今回の小説を書いて、僕はついに小説家になれたんだと思う。このテーマこそがぼくの書きたかったことだったのです」 (引用おわり)

- 1 「戦後満州から引き上げてきた」という言葉を一度も聞いたことがない人はいないだろうと思いますが、その満州で何が起こったかを多少なりとも正確に知っている人はどのくらいいるのでしょうか？私の通った高校では(約30年前)日本史の授業では1932(昭和7)年までは到達しませんでした。多分他の高校でも同じことが起こっていたのではないのでしょうか。現

在も同様かもしれません。

中国東北部において1932年に満州国の建国宣言が為されました。それ以後日本の敗戦までの間彼の地で行われたことは 植民地政策以外の何ものでもなかったということを改めて認識させられました。そしてまた植民地政策が如何なるものかを知りました。実際そこに実在した人物を書くことで証言しているのです。 大日本帝国軍隊(特に関東軍)および日本人が中国で行ったことを考えることは苦痛を伴います。できれば自分が属する社会は善良であって欲しいと単純に考えがちですが 事實はやはり都合よくばかりは運びません。否応なく現実に向き合わなければならないこともあるのです。

満州国における戦中および戦後史について実によく調査され、生きた歴史書ともなっています。「学生の皆さん どうぞ一読されますように」と推薦します。

- 2 中学生、高校生、大学生の頃にはただ漠然と「何のために生きるのだろう」なんて考えてみるものだと思いますが、現在進行形の若い人たちはどうでしょう？この本を読むと答えが見つかるかもしれません。

時代が時代、場所が場所ですから、生きるとは何かということをストレートに表現している人物ばかりが登場します。特に女主人公はその最たるものなのです。私は私なりの答えを見つけましたがここでは敢えてそれを書くのは止めます。皆さんは自分で見つけてください。

- 3 この小説は「生きるのに何が必要か」という問いにも答えてくれそうです。墓碑銘に「生きた、書いた、愛した」と刻んだのは小説家スタンダールであったと記憶していますが、人が一生を生きるためには 愛する人がいることと同時に愛されることが必要不可欠であると教えています。愛することと愛されること、この行為によって何が伝わるのでしょうか。お互いに生きるエネルギーとも言えるものを交換するのでしょうか。大人になればなるほど必要だと思いません。

この壮絶な生の戦いの物語を是非一度読んでみてください。